

高山寺藏寛喜元年識語本新訳華嚴經の複数種声点差声字について

榎 木 久 薫

一 はじめに

稿者は先に、「高山寺藏寛喜元年識語本新訳華嚴經」の漢字声調について、「保延本法華經單字」の反切によって知ることの出来る呉音單字声調との比較を行なった。その結果は、〈表〉に見られるように、本文献の差声声点によって把握される声調と、「保延本法華經單字」によって把握される呉音單字声調とに、ずれの見られるものであった。

〈表〉

入	去	平	経本文献	
			華字	單字
1	32	212	平	
1	50	422	上	
4	129	37	去	
4	252	56	入	
	93	19	平輕	
	147	27	入輕	
105	2	1	平輕	
200	2	1	入輕	
		4	平輕	
		4	入輕	
12	1		平輕	
12	1		入輕	

（表中の数値は、上段が異なり字数・下段が延べ字数）

本文献で上声点・平声輕点・入声輕点である場合は日本語アクセント化の結果であり、入声点・入声輕点と他の声点とのずれはアクセントに関する以外の理由か、声調の誤解である可能性が高い。しかし、平声点と上声点・平声点と去声点とのずれは、本文献の加点者の認識する漢字の呉音單字声調と、「保延本法華經單字」における呉音單字声調とがずれているための不一致なのか、何等かの原因があつて本文献の加点者において、單字声調から調値が變化したことの反映として差声声点が異なっているのか、確定することが難しい。また、右の場合を含め、去声と上声のずれ、平声輕・入声輕点の差声以外については、従来の研究において、その理由が十分に明らかにされていない。

そこで本放では、声点差声字の内、同一の漢字であつて複数種の声点差声のあるものに絞つて考察を加えることとした。同一漢字に対する複数種の声点差声は、その一方が單字声調からの調値の變化を反映している可能性が高いと考えられる。考察においては、平声と去声の複数種声点を持つ漢字を中心に、関連する声調として上声と去声・平声と上声の複数種声点差声のある漢字を主に取り上げる。

なお、本文献の字音加点は全体として呉音であるが、僅かながら漢音が加点されている。本文献の加点者において、呉音と漢音とで声調についての認識が異なつていた可能性がある。そこで本放では、明らかに漢音読と見なされる漢字、及び漢音読と見なされる漢字を含む差声文字列は考察の対象

から外した。

二 上声・去声の複数種声点差声字

まず、日本語アクセント化による声調変化とされる去声と上声のずれに関わるものとして、上声と去声の複数の声点差声のある漢字について見る。用例は次の諸例である。

*以下の用例表示は次の順序である

当該字・用例のアクセント型・用例番号・用例・巻次・行数

また、記号によるアクセント表示は、次の通りである

高音節●・低音節○・入声韻尾音節△(入声軽においては高音節▲となる)

鑑	○●●●	1 堅(去)ケン鑑(上濁)カイ 36・B214
	○○○●	2 忍(平)ニン鑑(主濁)カイ 77・496
嫌	●●●●	3 譏(上)キ嫌(上濁)ケム 58・260
	○●●●	4 嫌(去)ケム恨(上)ロン 57・37
	○○○●	5 嫌△(去)ケム怪(平)クエ(擦消ノ上) 77・114
心	○●●●	6 耐(去)ナイ心(上)シム (「耐」ヲ見消チ訂正下欄) 66・465
	○○○○	7 心(去)シム肺(平)ハイ 21・172
然	○●●●	8 焦(去)セウ然(上)ネン鳥(上)ウ鷲(平濁)シユ材(平)サイ 狼(平)ラウ 60・378
	○○○○	9 寢(平濁)キョウ然(去)ネン*薄墨) 39・502
	○○○●	10 兪(墨朱平)ケム然(墨朱去)ネン 6・336
	○○○●	11 恬(平)テム然(去)ネン 25・88
明	○●●●	12 闡(墨朱去)セン明(墨朱上)ミヤウ 6・439
	○●○△	13 明(去)ミヤウ徹(入)テツ 1・75
輞	○●●●	14 輪(去)リン輞(上)セマウ(偏ハ擦消ノ上) 10・289

莖	○○○●	15 味(平)輞(去)マウ 59・289
	●●●●	16 枝(墨朱上)シ莖(墨朱上)キヤウ 6・154
	○○○●	17 莖(墨上濁)*キヤウ(单点坎) 39・54
	○○○●	18 隠(平)ラン莖(去)キヤウ 59・276

涯	●●●●	19 涯(上濁)カイ 3・330
	○○○●	20 涯(去濁)カイ際(上)サイ 11・158

謬	●●●●	21 謬(墨上)メウ 59・402
	○△○●	22 錯(入)シヤク謬(去)メウ 18・242
	○△○●	23 錯(入)シヤク謬(去)メウ 36・B174
	○△○●	24 錯△(入)シヤク謬△(去)メウ△ 34・72
	○△○●	25 錯(入)シヤク謬(去)メウ 44・25
	○○○●	26 舛(平)セン謬△(去)メウ 18・166

臺	●●●●	27 臺(墨上濁)タイ 39・54
	○○○●	28 臺(去濁)タイ樹(上)シヤ 60・110
	○●●●	29 臺(墨去濁)タイ樹(墨上)シヤ 39?
	○●●●	30 臺(去濁)タイ*樹(上)シヤ(樹)ハ擦消ノ上) 39?

すべて二音節字であつて、一音節字の用例はない。一字のみの差声例を除いて、語頭字に上声点の差声例は見られない。一字のみの差声例は、一語として差声されたものか、二字以上の熟語の一部として差声したものか判然とせず、考察においては二次的な扱いに留めねばならない。

一字のみの差声例を除くと、上声点差声例は、すべて一音節上声点差声字か二音節去声点差声字の後に見られる。一方、去声点差声例は、語頭か、平声点・入声点差声字の後に見られる。

このような上声点差声例と去声点差声例の相補的な分布は、単字声調が去声である二音節字において、日本語アクセント化における中低型アクセントの回避として説明されているものである。このことから、ここで取り上げた諸字は、本文献の加筆者において、単字で去声と認識されていたものと考えられる。ちなみに、

「鎧・心・然・明・莖・謬・臺」の諸字は「保延本法華經單字」で、去声とされている。「嫌」は「保延本法華經單字」で平声とされているが、本文献の加点点者においては、去声と認識されていたものであろう。

三 平声・去声の複数種声点差声字

平声と去声の複数の声点差声のある漢字は、次の諸例である。

- 冠 ○●●○○○ 31 冠(去)クワン而(上)三冠(平)クワン 68・38
- 冠 ○●●○○○ 32 冠(去)クワン而(上)三冠(平)クワン 68・38
- 玩 ○●●○○○ 33 珍(去)チン玩(平)クワン 34・344
- 玩 ○●●○○○ 34 玩(去)クワン味(平)ミ(玩)ヲ見消チ訂正) 48・143
- 堉 ○●○○○ 35 虹(上)濁)ク堉(平)ケイ 58・186
- 堉 ○●○○○ 36 埤(平)ヒ堉(去)ケイ(一埤)ヲ見消チ訂正下欄・
- 峻 ○●○○○ 37 埤(平)ヒ堉(去)ケイ 10・166
- 峻 ○●○○○ 38 高(去)カウ峻(平)シユン 64・300
- 低 ○○○○○○ 39 雉(上)チ堉(入)濁)テフ崇(平)ソウウツウ峻(去)シユン 66・77
- 低 ○○○○○○ 40 喉(平)コウ吻(平)フン吐(上)ト納(入)ナフ抑(入)ヲク
- 難 ○●○○○○○ 41 低(去)テイ下(平)濁)ケ 77・174
- 難 ○●○○○○○ 42 低(去)テイ影(平)ヤウ(一但)見消チ訂正) 59・164
- 難 ○●○○○○○ 43 艱(去)カン難(平)ナン不(上)フ憚(平)タン 66・75
- 難 ○●○○○○○ 44 難(去)測(入)シキ 3・166
- 難 ○●○○○○○ 45 難(去)測(入)シキ 3・139

- 練 ○●○○○○○ 46 該(去)カイ練(平)レン 76・438
- 勵 ○●○○○○○ 47 練(去)ラン 34・374
- 勵 ○●○○○○○ 48 專(去)セン勵(平)レイ 30・12
- 憚 ○●○○○○○ 49 勵(去)ナイ 18・314
- 翳 ○●○○○○○ 50 艱(去)カン難(平)ナン不(上)フ憚(平)タン 66・75
- 翳 ○●○○○○○ 51 勿(入)モツ憚(去)タン 77・111
- 翳 ○●○○○○○ 52 癡(上)チ翳(平)エイ 60・59
- 翳 ○●○○○○○ 53 癡(上)チ翳(平)エイ 58・98
- 翳 ○●○○○○○ 54 癡(上)チ翳(平)エイ 25・159
- 覆 ○●○○○○○ 55 癡(上)チ翳(平)エイ 27・50
- 覆 ○●○○○○○ 56 覆(入)フク翳(去)エイ 36・B129
- 翳 ○●○○○○○ 57 翳(去)エイ羅(上)ヲ翳(平)エイ羅(上)ヲ 45・48
- 翳 ○●○○○○○ 58 瑕(平)ケ翳(去)エイ 44・128
- 翳 ○●○○○○○ 59 翳(去)エイ膜(入)マク 17・383
- 翳 ○●○○○○○ 60 翳(去)エイ羅(上)ヲ翳(平)エイ羅(上)ヲ 45・48
- 翳 ○●○○○○○ 61 翳(平)エイ膜(入)マク 60・382
- 翳 ○●○○○○○ 62 翳(去)エイ 30・165
- 翳 ○●○○○○○ 63 翳(去)エイ 30・166
- 翳 ○●○○○○○ 64 翳(去)エイ(擦消)ノ上) 30・243
- 傲 ○●○○○○○ 65 翳(去)エイ 16・96
- 傲 ○●○○○○○ 66 翳(去)エイ 34・323
- 傲 ○●○○○○○ 67 翳(平)エイ△ 3・59
- 傲 ○●○○○○○ 68 萃(去)スイ止(平)シ 28・C188
- 傲 ○●○○○○○ 69 萃(平)スイ止(平)シ 11・103
- 傲 ○●○○○○○ 70 萃(平)スイ影(平)ヤウ 1・34
- 傲 ○●○○○○○ 71 醉(平)スイ傲(去)カウ 79・53

	腸	○ <u>○</u> ○●	72 傲(平)カウ慢(去) 12・352
	腸	○●○●○●○●○	73 腸(去)チャウ腎(去)シン肝(去)カン肺(平)ハイ 27・265
	腸	○●○●○●○●○	74 腸(墨去)チャウ腎(墨平)シン肝(墨去)カン肺(墨平)ハイ
	腸	○●○●○●○●○	(擦消ノ上) 27・297
	腸	○●○●○●○●○	75 腸(平)チャウ 25・236
	麗	○●○●○●○●○	76 崇(上)シユ*麗(平)ハイ(墨色薄) 11・23
	麗	○●○●○●○●○	77 崇(薄墨朱上)シユ麗(薄墨朱平)レイ延(薄墨朱平)エン
	麗	○●○●○●○●○	表(薄墨朱平)モツ 33・17
	麗	○●○●○●○●○	78 精(去)シヤウ麗(去)ハイ 25・50
	麗	○●○●○●○●○	79 麗(墨平)ハイ 22・79
	麗	○●○●○●○●○	80 麗(墨平)ハイ 28・B47
	腎	○●○●○●○●○	81 腸(墨去)チャウ腎(墨平)シン肝(墨去)カン肺(墨平)ハイ
	腎	○●○●○●○●○	(擦消ノ上) 27・297
	腎	○●○●○●○●○	82 腎(去)シン肝(去)カン肺(去)ハイ 25・236
	腎	○●○●○●○●○	83 腸(去)チャウ腎(去)シン肝(去)カン肺(平)ハイ 27・265
	腎	○●○●○●○●○	84 腸(墨去)チャウ腎(墨平)シン肝(墨去)カン肺(墨平)ハイ
	腎	○●○●○●○●○	(擦消ノ上) 27・297
	心	○●○●○●○●○	85 心(去)シム肺(平)ハイ 21・172
	心	○●○●○●○●○	86 腸(去)チャウ腎(去)シン肝(去)カン肺(平)ハイ 27・265
	心	○●○●○●○●○	87 腎(去)シン肝(去)カン肺(去)ハイ 25・236

これらの諸例は、差声のタイプとして次のように類型化出来る。

a (○)●○●○ 一音節上声点差声字か二音節去声点差声字の後に平声点差声

b (○)○●○● 語頭か平声・入声点差声字の後に去声点差声

c (○)●○●○ 一音節上声点差声字か二音節去声点差声字の後に去声点差声

d ○○● 語頭に平声点差声

e ○○● 一字のみに去声点差声

f ○○● 一字のみに平声点差声

「冠」・「憚」の諸字においては、a (○)●○●○・b (○)○●○●○という相補的な分布のパターンが見られる(このような分布パターンが見られることについては、後で考察する)。

「翳」は、a (○)●○●○・b (○)○●○●○の差声例も見られるが、c (○)●○●○・d ○○●も見られる。このうちc (○)●○●○の用例60「翳羅翳羅」は「翳羅」のまとまりで熟語と考えられる。d ○○●の用例61「翳膜」は、同じ語に去声点差声例59 ○○●が見られる。

「萃」については、a (○)●○●○・c (○)○●○●○の差声例は見られないが、b (○)○●○●○とd ○○●の用例が見られる。d ○○●の用例69「萃止」は、「翳膜」と同様、同じ語に去声点差声例68が見られる。

「傲」については、同じ語に異なる声点の差声された用例は見られないが、b (○)○●○●○とd ○○●の用例が見られる。

「翳」「萃」「傲」の内「萃」「傲」については、本文献の加点点者において、単字で平声と認識されていた可能性を否定できない。しかし「翳」の用例に基づいて言えば、本文献の加点点者において、単字で去声の字が、語頭で平声となる場合があったことが指摘できる。ただこの様な変化は、「翳膜」の用例に平声点差声例と去声点差声例とが見られることから、語の熟合度をどの程度

と認識するかによって、生じるか否かが分かれたと言うことが出来るよう。

「腸」については、一字のみの差声例を除くと、b (○○○) の用例しか見られない。

「麗」「腎」「肺」においては、a (○●○○) と c (○○●○) の用例が見られる。この内、「麗」の用例78「精麗」については、なぜ去声点が差声されているのか明らかにしたい。しかし、「腎」「肺」の用例に基づいて、次のことが指摘できる。

この二字を含む用例 81 83 84 86 「腸腎肝肺」 82 87 「腎肝肺」については、当該字に去声点を差声した例と平声点を差声した例が見られる。これは、「腸」「腎」「肝」「肺」を一字で一語と見なすか、「腸腎」「肝肺」のまとまりで熟語と見なすかの違いと考えられる。ここで指摘しておきたいことは、「腸腎」「肝肺」を熟語として差声した例が、上声点差声ではなく平声点差声である点である。従来説かれているところは、語アクセントとして中低型アクセントとなることを避けるために上声調となるというものである。「腸腎」「肝肺」は、「腸」「腎」「肝」「肺」を一字で一語と見なして去声点を差声したと考えられる例が一方で見られることから、熟語であっても臨時一語的なものであったと考えられる。このような場合に、上声点ではなく平声点を差声していることは注目すべきである。

31 32 「冠而冠」についても、同様と考えてよいであろう。

「冠」は単字で去声と認識されていたものと考えられる。「冠而冠」は、このまとまりを一語と見なしているものと考えられる。その際、三字目の「冠」に上声点ではなく平声点を差声しているのである。

ここで前に立ち戻って、単字で二音節去声字であって、一音節上声点や二音節去声点差声字の後で平声調となるというアクセント変化について考察を加えたい。

従来、単字で二音節去声の字が、一音節上声点や二音節去声点差声字の後に位置する場合、その二音節去声は、上声化すると説かれていた。この様な声調変化は、語アクセントとしての中低型アクセントを避けるためと解釈されている。確かに用例としては、そのようなものが多いのであるが、根本的には、中低型アクセントを避けるために、何故二音節去声が上声になるのか、その理由が考えられなければならない。

二音節去声字の後の二音節去声字が上声化するということは、語アクセントとしては、次のように変化したということになる。

1 ○●○○ ↓ ○●○○

しかし、中低型アクセントを避けるためのアクセント変化としては、他にも次のような二つの可能性がある。

2 ○●○○ ↓ ○○○○

この三つの変化のタイプを比較すると、1 では、変化した結果として二音節上声点差声字が現れる。これに対して、2・3 では、二音節の平声点差声字が現れる。既に論じられているように、呉音の単字声調が平・去・入の三声体系であり、そのことが認識されていたとすれば、1 で現れる上声点差声字は、日本語アクセント化の結果として現れたものであることが理解される。

これに対して、2・3 で現れる平声点差声字は、その字の声点差声のみを見ては、その声調が単字としてのものか、語アクセント化の結果として現れたものか識別することが出来ない。

つまり、中低型アクセントを避けるために、二音節去声点差声字の後の二音節去声字に上声点を差声するのは、呉音単字声調に対する認識を保ちつつ、実際の読誦における日本語アクセント化に対応するためであった可能性がある。

このことは、逆に言えば、2・3 のような声点差声が見られるとすれば、その文献の加點者は、単字の声調より実際の読誦にお

ける語アクセントの方を優先しているということができる。

また、臨時一語と考えられる「腸腎」「肝肺」で○●●●●(二字目が上声化)ではなく、○●○○○(二字目が平声化)のアクセントが現れるのは、熟合度の低い臨時一語においては、○●●●●よりも○●○○○の方が相応しいアクセント型であった可能性があるので。

四 平声・上声・去声の複数種声点差声字

平声点・上声点・去声点の三種の声点差声を持つ字は、「關」の一字である。

88	弘(上濁ク)關(平)ヤン	3.273
89	開(巻)カイ關(平)ヤン	57.326
90	關(平)セン	3.34
91	關(平)セン	18.329
92	關(平)セン	3.241
93	關(墨上)揚(墨上)ヤウ	33.245
94	關(墨朱)去(セン)明(墨朱上)ミンヤウ	6.439
95	關(去)セン	3.164
96	關(墨去)セン	4.31
97	關(墨去)セム	62.304

一字のみの差声例には、平声点差声例と去声点差声例とが見られる。これら一字のみの差声例を除くと、語頭の去声点差声例と一音節上声・二音節去声点差声字の後の平声点差声例が見られる。この点からは、先に平声・去声の複数種声点差声字の項で考察したアクセント変化の二類型と同じパターンが見られる。このことから、この字は、本文献の加点者においては、単字で去声字と認識されていたものと考えられる(「保証本法華経単字」では平声字)。ただ、語頭上声点差声例が一例あること理由は明らかに

し難い。

五 平声・上声の複数種声点差声字

平声点と上声点の二種類の声点差声を持つ字は、次の諸字である。

98	阿(平)ア	蘭(去)ラン	若(平)ニヤ	1.18	
99	阿(平)ア	揭(入)カン		13.351	
100	獸(平)エム	惡(平)ヲ		58.380	
101	獸(平)エム	惡(平)ヲ	(擦消ノ上)	12.217	
102	惡(上)ヲ	賤(平)セン		79.324	
103	紺(去)コム	蒲(平)	(某字ニ重書)	48.176	
104	訶(去)リ	蒲(墨上)		45.33	
105	蒲(墨上)			45.33	
106	又(平)ニヤ	迦(平)カ		3.77	
107	樓(上)ル	博(入)博	ハク又(平)ニヤ	3.84	
108	樓(上)ル	博(入)博	ハク又(平)ニヤ	3.71	
109	又(上)ニヤ	壁我ノ反		76.399	
110	波(平)ハ	濤(平)タウ		13.333	
111	羯(墨上)キヤ	羅(平)ラ	波ノ	45.60	
112	烏(墨上)ウ	波(墨上)ハ	跋(墨入)ハク	多(墨上)タ	45.68
113	連(平)レン	膚(平)フ		27.8	
114	潤(墨平)ニン	澤(墨入)ダク	タク皮(墨平)ヒ	膚(墨上)フ	25.297
115	連(平)レン	膚(平)フ		25.234	
116	皮(平)ヒ	膚(平)フ		75.205	
117	迅(平)シン	流(平)ル		1.163	
118	駛(上)シ	流(平)ル		12.352	

○●●○○○●●	119	湍 <small>(去)</small> タン流 <small>(上)</small> ル競 <small>(平)</small> キヤウ奔 <small>(去)</small> ホン 13・284
●●○	120	熙 <small>(上)</small> キ怡 <small>(平)</small> イ 59・56
●●○	121	熙 <small>(上)</small> キ怡 <small>(平)</small> イ 48・131
●●○	122	怡 <small>(上)</small> イ暢 <small>(平)</small> チャウ 45?
●●○	123	怡 <small>(上)</small> イ暢 <small>(平)</small> チャウ(某字ニ重書・「暢」ヲ見消テ訂正) 66・138
●●○	124	怡 <small>(上)</small> イ暢 <small>(平)</small> チャウ 71・79
○●○	125	恬 <small>(平)</small> テム怡 <small>(上)</small> イ 4・162
○●○	126	嬰 <small>(平)</small> ヤウ安 <small>(平)</small> マウ 60・544
○●○	127	身 <small>(去)</small> シン嬰 <small>(上)</small> ヤウ 21・145
○●○	128	瞬 <small>(平)</small> シユン 68・59
●●○	129	不 <small>(上)</small> フ瞬 <small>(上)</small> シユン 76・282
●●○	130	瞬 <small>(上)</small> シユン 22・162
●●○	131	瞬 <small>(上)</small> シユン 68・11
○●○	132	焦 <small>(去)</small> セウ然 <small>(上)</small> ネン鳥 <small>(上)</small> ウ驚 <small>(平)</small> シユ材 <small>(平)</small> サイ
●●○	133	狼 <small>(平)</small> ラウ 60・378
●●○		狐 <small>(上)</small> コ狼 <small>(上)</small> ラウ 27・270

これらの諸字は、一音節字と二音節字に分けることが出来る。まず、一音節字であるが、用例のアクセント型からこれらの字が単字で平声字であったのか去声(上声)字であったのか推定することは難しい。「保延本法華経単字」では、「阿」「膚」は平声字、「蒲」「叉」「波」「流」は去声字である。これらの諸字は、本文献に加点した者においても、単字で去声であったものが多いであろう。

単字で一音節去声字については、理論的には、先に二音節去声字について述べたことと同様のことが言える。一音節去声字は、日本語アクセント化の過程で、曲調アクセントを避けるために上

声化したと説かれているが、平声化することによっても曲調アクセントを避けることが出来る。しかし、平声点を差声すると、単字で本来平声である字と区別がつかなくなる。呉音単字声調では本来存在しない上声点を差声することによって、単字声調についての理解と実際の読誦の際の日本語アクセント化とを折り合わせていたと考えることが出来る。ただ、諸例を見る限り、二音節去声字における平声点差声の場合の様な分布のパターンは見出せない。

また、113 115 「連續」に平声点差声例と上声点差声例とが見られることから、語の熟合度をどの程度と認識するかによって生じるか否かが分かれたと言いうことが出来る。

次に二音節字について見る。諸字の内、「保延本法華経単字」に掲出されている字は「狼」のみで去声である。上声点差声例からは、これらの諸字は本文献に加点した者においても去声であったと思われる。ただ、平声点差声例については、平声・去声の複数種声点差声字の項で見たような一音節上声点差声字・二音節去声点差声字の後に現れるものではなく、語頭か平声点差声字の後である。

六 その他の複数種声点差声字

以下、その他の複数種声点差声字について簡単に触れる。

平一平輕

平声点と平声輕点の二種類の声点差声を持つ字は、次の諸字である。

暢○○	134	暢 <small>(平)</small> チャウ 3・201
○●○○	135	宣 <small>(去)</small> チャウ 34・146
○●○○	136	怡 <small>(上)</small> イ暢 <small>(平)</small> チャウ(某字ニ重書・「暢」ヲ見消テ訂正) 66・138

用例が僅かであり、際立つたことを述べる事が出来ない。ただ、既に論じられているように、平声軽の調値が●○というものであるとするならば、「吒」に対する平声軽点は、疑問である。

入—入軽

入声点と入声軽点の二種類の声点差声を持つ字は、次の諸字である。

級	或(入)ワク級(入)キフ	55・239
○	層(去)濁ソク級(入)整キフ	16・9
●	飄(上)へウ撃(入)キヤク	1・189
○	擊(墨)入キヤク	60・32
○	撫(平)濁フ撃(入)キヤク	22・106
○	飄(上)へウ撃(入)キヤク	3・410
●	扣(薄)墨朱平(入)ウ撃(薄)墨朱入(整)キヤク	33・28
○	莖(墨)平キヤウ飾(墨)入(入)シキ	22・30
○	飾(墨)入濁シキ危(墨)平(入)シキ	60・97
○	莖(平)キヤウ飾(入)濁(入)シキ	10・48
○	莖(平)キヤウ飾(入)濁(入)シキ	75・14
○	校(墨)志ケウ飾(墨)入(整)濁(入)シキ	6・148
○	濁(入)濁テヨク	30・196
○	擾(去)ネウ濁(入)濁テヨク	7・221
○	渾(去)ロン濁(入)濁テヨク(擦消ノ上)	12・288
○	渾(去)ロン濁(入)濁テヨク	17・9
○	谷(墨)入コク響(墨)平カウ	44・292

怡(上)イ暢(平)キヤウ	71・80
怡(上)イ暢(平)キヤウ	45?
暢(平)キヤウ	3・31
暢(墨)平整キヤウ克(入)コク	(去)カイ 22・126
瑟(入)整シユツ吒(平)タ	76・387
尼(上)ニ吒(平)整タ	22・183
1421411	
1401391	
138137	

従来説かれているところでは、入声軽点差声は、一音節上声か二音節去声の声点差声字の後か、一音節上声点差声字の前に現れるとされる。諸例を見ると、一音節上声字・二音節去声字の後に入声軽点差声が見られ、語頭か平声字・入声字の後に入声点差声が見られる字がある一方で、逆に平声字・入声字の後に入声点差声が見られる字もある。また、157 158 「渾濁」では、入声点差声例と入声軽点差声例とが見られる。

平—入

平声点と入声点の二種類の声点差声を持つ字は、次の諸字である。

巖(平)濁カム谷(入)整コク(某字二重書)	66・220
乏(入)ホク	34・398
匱(墨)朱平(入)キヤク	78・180
博(入)ハク奕(入)キヤク	59・89
樓(上)ル博(入)整濁(ハク)又(平)シヤ	3・84
樓(上)ル博(入)整濁(ハク)又(平)シヤ	3・71
疏(墨)上(入)勒(墨)入(入)コク	45・386
轡(平)ヒ勒(入)整(入)コク	62・80
167166165164163162161160	
或(平)殺(入)コク	59・289
或(入)斬(平)濁サム	66・164
或(入)剝(入)ハク	66・164
或(入)ワク挑(平)テウ	55・238
或(入)驅(上)ク	66・165
172171170169168	
或(入)ワク挑(平)テウ	66・164
或(入)ワク級(入)キフ	55・238
175174	
截(入)セツ	55・238
173	
過(平)クワ打(平)楚(上)ノ權(入)濁タツ或(入)ワク	

霑 ○○○
 霑 平濁 シハ 30・48
 霑 (平濁) シハ 25・269
 △
 門 ○○○●
 門 (平) 闕 (去) ヲン 68・69
 門 (薄墨朱平) 闕 (薄墨朱入) タツ 33・18
 門 (平) モン 闕 (入) 濁 タツ 22・40
 門 (墨入) 蔽 (墨平) ハイ 4・178
 182181180179178177176
 「或」は喉内入声韻尾字であり、唇内入声韻尾の母音化に基づく平声点差声の様な理由は考えにくい。「霑」「門」は、本来入声韻尾字ではなく、入声点差声は、何等かの誤解に基づくものである。

上―入
 上声点と入声点の二種類の声点差声を持つ字は、次の諸字である。

薩	○●●	雞 (去) ケイ 薩 (上) サ 76・433
	○△△	薩 (入) サツ 唾 (上) タ 57・72
薄	●○○	薄 (墨上濁) ハ底 (墨去) テイ 45・24
	○△△	薄 (入) ハク 祐 (平) ロ 21・203
	○△△	薄 (入) ハク 皮 (平) ヒ 25・236
末	○○●	苦 (平) セム 末 (上) マ 羅 (上) ラ 3・267
	○△△	末 (入) マツ 30・289

いずれの字も、上声点差声例の字音仮名表記には、韻尾表記がない。そのことと、入声点差声とのずれを避けるために上声点を差声したものと考えられる。

七 まとめ

本文献において複数種の声点差声のある漢字のすべての用例について、その理由を明らかに出来ていないが、次の二点について

は、言い得るものと考えられる。

一つは、従来日本語アクセントとして中低型アクセントを避けるために上声化すると説かれて来た、一音節上声字・二音節去声字の後の二音節去声字が、同じアクセント的条件下において、平声化することがあったと言うことである。この条件において去声字が上声化するのには、単字としては存在しない上声の声点を差声することによって、単字と音調に対する認識を保ちつつ、実際の読誦における日本語アクセント化に対応するためであったと考えられる。これに対して、本文献でこの条件において平声点が差声された用例に、臨時一語と見なされるものがある(81「腸腎」84 86「肝肺」)。このことから、臨時一語的な漢語アクセントにおいては、一音節上声字・二音節去声字の後の二音節字は、平声であるのが相応しかった可能性が指摘できる。

二つ目は、熟語として同一の語であって、異なった声点の差声された用例が見られる(59 61「翳膜」・68 69「萃止」・81 83「腸腎」・84 86 87「肝肺」・157 158「渾濁」)。これらの用例は、どちらの差声のアクセント型も日本語アクセントとして不自然なものではない。それにも拘わらず、異なった声点の差声された用例が見られるのは、語としての熟合度をどの程度と認識するかによって、更にアクセントが変化する場合があることを示すものと考えられる。

注

- (1) 拙稿「高山寺藏寛喜元年識語本新訳華厳経の漢字声調について―保延本法華経単字との比較―」(鳥取大学教育地域科学部紀要 教育・人文科学 第四巻 第二号 平成十五年一月)
- (2) 去声と上声のずれ、平声軽・入声軽点の差声については、次の論考がある。

沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』第一部第四章 呉音に於ける和化現象の検討 第一部第五章 呉

音の声調体系に就て (昭和五十七年三月 武蔵野書院)

(3) 拙稿「字音直読資料としての高山寺藏寛喜元年識語本新訳
華嚴経―漢音系字音の混入について―」(鎌倉時代語研究 第

二十三輯 平成十二年十月)

(4) 注(2) 沼本克明氏の論攷

(5) 注(2) 沼本克明氏の論攷

〔付記〕本稿を成すに当たり、文献の閲覧・調査に関して、高山寺小川千恵御住職を初めとする高山寺御当局の方々の御高配を賜った。また、築島裕先生・小林芳規先生を初めとする高山寺典籍文書総合調査団の方々には、様々のお導きを頂いた。記して深謝申し上げる次第である。